

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. *11*



令和7年11月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第11号 No.810

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 二月号 (通巻八一〇号)

◇今月の二十首詠……煙草

田土成彦 2

■作品

高尾恭子・高津砂千子他 4

A 鷹野長子他 34

B 武田幸子他 60

C 津村秀樹他 70

A 綾 央子他 82

■オリープ集 藤川淳子・藤澤元子他 52

【特集】戦後八十年の今おもうこと

13

A 作品3首とエッセイ……秋山真理子・石田明彦・今井敏博

金近敦子・国原喜美子・近藤芳仙・酒井 牧・坂本佐和子

さとうちえこ・穴戸千佳子・設楽まゆみ・高尾恭子

永田進一・中村博子・藤澤元子・藤森巳行・本元由美子

丸山 修・三浦好博・御代田澄江・八乙女由朗

B 今読みたい短歌 香川 進の歌 三好聖三

山本友一の歌 滝田靖子

桃原邑子の歌 許田邦子

小関茂ほかの歌 関根和美

C 戦後八十年によせて 土浦と戦争 磯田ひさ子

広島と戦争 檜垣美保子

沖繩と戦争 仲西正子

◇今月の二人

多田宜文・天野純代 44

私と短歌との出会い (279)

室家洋子 47

■〈第一歌集を読む〉32

48

磯田ひさ子歌集『辺鐘』

―嫁ききて二十年耐へし浅草の地―

山本 孟

■遊覧寄港〈遠き日の物語〉

村石けさ子 58

■歌壇月旦

俵万智『生きる言葉』

西堤啓子 59

■九月号作品批評

74

A……藤田美智子・本元由美子

福光敬子・鈴木文子

B……中山真弓・藤田しん子

C……磯田ひさ子

オリープ集……柴田登志恵

十首選

大久保麗子・和田健二 92

今月の二人・作品評

久我田鶴子 46

最近の歌誌より

〔編集部〕 93

クリップ……94

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

煙 草

田土 成彦

一九四三年生まれ
宙の会所属
歌集に「糸遊伝説」などがある

バス停のそばのタバコ屋こぼたれぬハイライト買ひしは五十年前

両切りのゴールデンバット缶ピース吸ふなく買ふなく過ぎてしまひぬ

灰皿にもみ消す煙草爪の脂他生を奪ひいのち生き来し

末の子が生まれしときに止めしタバコ心残しても再度は吸はず

正統より異端を好む性癖にコロナワクチン打たず過ぎ来し

選挙には必ず行つた大方は落選をする人をえらびて

学名はコロラビス サイラ サンマではなくてサイラと呼んでください

冷や奴翻訳したらクールガイかなり異なる様な気がする

あぢさゐの雨のあしたの濃紫近づいてくる嵐電のおと

紫陽花のすがれて残る夕つかたとどめやうなき時を刻みて

産土の裏の陰気な細道は通ることなしこの度もなほ

戦没者を堤の上で焼きしとかその数しらず場所は残れど

迷路など抜けてみたとして何になるその小半時脳を急かせて

温暖化対策は何の益もなく掛けし百兆円もとの木阿弥

トランプはパリ協定を離脱する無駄な出費はしない算段

温暖化に遅れて増えるCO₂それはぬくもるビールの気泡

かなしみの数だけ優しくなれるとかそんな生き方はしてこなかった

紀州産金山寺味噌しろ粥に添へて長月なかばの昼餉

言ひ様のない悲しみに野菜室に腐ってしまった梨を取り出す

銀河系 銀河団 超銀河団愉快のごとし孤独と言ふは

作品

A

高尾恭子

雷神

・大

ちはやぶる神に続べられ連池の朝の青空ゆがんで映る
ラジオ体操おえた境内しずもりて拍手ふたつ願いはひとつ
クスノキのひかりをゆらす蟬声を仰ぐは母の白きバラソル
沈黙をまもりとおした乙女らのひと息に吐く胸のかたまり
出撃の徒に一服をふるまいし同じ八月茶人は逝きぬ
乾坤のはざまを向日葵ぐいと咲く日輪のように雷神のように
ジャングルに地獄を踏んだ帰還兵義父がいのちを繋ぐ夫と子

高津砂千子

キンエボシ

・平

鈍行の日帰り旅にゆくとこ暑さにうだり部屋にこもりぬ
この暑さかこちておれずリハビリの教室にゆく己励まし
リハビリの教室にゆき声に出し休うこかす仲間とともに
野放図に茎伸ばしゆくキンエボシこの自由さの羨ましくも
西陽防ぐゴーヤの次は何にせん菫見上げつつ考えており
日が続く天気予報の暗れマーク葉月の終わりプロ野球観る
プロ野球地元選手の活躍に声をあげつつ手を叩きたり

滝田靖子

墓処

・新

飴玉をポリポリしてゐただけなのに歯が割れるつてどういふことよ
「予約のない人の受診は出来ません」歯科医院つてさういふ感じ
咆哮の獅子に似てると見るうちに解けてたちまちただの雲になる
来年はもう無理だなど母が言ふ墓所への長い石段見上げて
墓所への長い石段のほり行く焼けた手すりを頼りとしながら
地方紙のお悔やみ欄に君の名のないことを今日の喜びとする
雷鳴は頭上を去らず独り居のざわつく心にただ歌集読む

田土成彦

八月尽

・宙

八月尽巻頭詠の二十首は未だ形をなさぬまま過ぐ
ロンギヌスの槍と聖杯持つてゐる聖堂は信者を集めて豊か
キリストの遺影を写す聖骸布ヨハネ大聖堂の収入源に
オリオンの三つ星が地表に降るころナイルの恵みの始まるといふ
神々の降臨のさま書き留めてエゼキエル書の二重の車輪
古代から来てゐる宇宙人たちを神々としてあがめし歴史
江ノ島の弁財天の裸体像抱へる琵琶の音はひびくや

田 土 才 恵

スマホ

・宙

寿命など考えてみても仕方なし生きの限りを生きる他なく足腰のいまは普通にあるものゝあと幾ばくと思うわびしさ生きゆるる苦しさ声に出さぬまま去りゆく人よ熱暑の間を独り住むわびしさを連れマンションの域を出ぬまま日々過ぐすとや去りゆるける人の哀しみ蒸し暑き空気のなかをひたに漂う夏休み来れば訪ねんと言う孫の帰省ひたすらスマホを握る無意識に利き腕が出る痛めたる腕かばうことつゆと忘れて

玉 井 綾 子

この夏

・羊

日傘さし高校説明会へ行く 息子は未だベッドを出でず登校への子の意欲なくリモコンの電池の蓋はまだ見つからず好きだったパンを買えども子は食はず立秋過ぎて猛暑日続く家族四人異なる部屋にそれぞれのデバイスを持ち日々やり過ぐす春江町全域の蟬が集まりて名主屋敷の耳を乗っ取る

子は部屋之母は施設の外に出ず三十八度のトウキョウを知らぬ戦後八十年この夏広島島の出身と知る吉川晃司

中 島 央 子

日暮

・森

ネジ一つ弛みし様なる足取りに「転ばないで」子の声が飛ぶまちはがはす食後の葉飲みました白色・水色・淡茶の錠剤「血圧も安定してます」淡々とノートパソコン打つ医師の横顔河川敷のきらめく草生に立ついきれ無音の原の無音の日暮あと少し筋力戻さむ歩行器と茜の空のうすれゆくまで食卓に必ず出さるる冷奴一箸つまんで「ハナ」と分けあふ七曜も月々さへも予定なし筋立つ手の甲しづかにさする

永 田 進 一

異口同音

・山

独裁者21世紀を睥睨すわれらは如何に生きるべきか戦場に投げ出されし兵なれば戦地にいかに生命保つかブーチンに一杯喰わされトランプはそれでも尚も権力誇示す敗戦より復興遂げて甲子園喜び溢れ沖縄尚学優勝す盆休み当方これより多忙なり分別整理の保存と廃棄雨戸繰る戸袋の下蜂の巣あり放水作戦真夏の陣酷暑とう酷暑ならざる年はなく年々歳々異口同音なり

永 塚 節 子

時間

・銀

朝一番カーテンを繰る楽しみはあさがお咲くやけさは何色この暑さ乗り切るためと言いきかせ成分計算おおまかとなるトーストにバター付けるとき過りくるガザの男の子の暗きまなざしヨルダン川西岸地区のベッドウインのチーズ旨しという夢の話補助軸を短くなった鉛筆に過ぎた時間を補わんとしして帰り来ぬひとりひとりへ呼びかける歌のフレーズまた会う日まで蟬の声けさは届かずようやくに暑かりし夏の終り見える

仲 西 正 子

命

・沖

闇のなかぶるんぶるんの二の腕に蚊の体当り吸わせるものかようやくに侵入りしものを起こされて逃げゆきし蚊に咬くばかり渦巻きの蚊取り線香のちろちろと燃える心のわれにもあれな猛暑日は蝶も蜂も訪れず気合いも失せしゴーヤーの花いつもより十日おくれの蟬のこえラップで唄う地球は暑い水瓶のメダカはこより他処知らず睡蓮の葉の陰にてあそぶ水瓶の小さき睡蓮花つぼみひとつなれども待つことのあり

中村博子

沸騰化

・漣

ゆるゆると横たわりつつ朝、昼、夕完食してはひと日暮れ行く
体温を超ゆる京都や熱中症警戒アラート鳴り響く夏

温暖化いえ沸騰化の地球なりいつか生き物茹でられるのや

孫二人とラインの交信なす日々や孫は二十代三十代よ

このように孫とラインの交信する時代の来とは思わざりけり
便利な世なれどあまたの電波飛ぶ地球に災い起こらぬように
日めくりを繰らずに三日過ぎにしやスピード増して日は暮れて行く

西堤啓子

時計草

・天

紫陽花の縋せてほのかに闇をなす雨のまほろば猫住まう寺
花蕊にマルハナバチの勤しんで連の宇宙はゆらりと立たす
甘きまま外つ国の風に吹かれたしヒューガルテンのビール冷たく
カレンダー読めなくなった君がいて冷蔵庫前ただ立ちつくす
モーヴ色の袖ひるがえし呼んでみる若く直ぐなる不在の君を
伝説のムカデを射ればキューウと鳴く歴史博物館を君と訪ねた
美しい山川が今やリスクとは 時計草のように笑って過ごす

浜谷久子

年月

・地

隣人の急の発病担う役鍵を預かり何とぞきでもと
目に見えて衰える息退院を待っていますと声かけ見送る
自治会へ届ける計報回覧は地域に馴染んだひとの最後の
実感のわかぬ計報は嘸みしめて時間をかけて諾うほかなく
生前と変わらず見守る真夏日の今は空き家を草など抜いて
その夫とわが父母へ欠かさず供花を贈り続けた隣人
毎日を顔を合わせて五十年入院したまま帰ってこない

檜垣美保子

無言

・昂

沈黙のなかにも聞こえることばあり稲妻しろくよみがえる夏
きんきんに冷えたる水を口にくぐみ水色の付箋の一行を読む
北の空無言にはなやぐ虹ありて橋のなかほどひとり見上ぐる
柵をこえなだるる胡瓜の葉は黄ばみ散水のたび黄の花は散る
裏庭をよこぎるイタチを見しふたり見ぬふたりいて家族かまし
ひとところ軋む床あり反り返る床あり二十七歳の家
猛暑日のアツイあいつをねじ伏せて無言に出でゆく十五歳男子

福田庸子

内湾

・今

湧き上がる人道雲を追ひゆけり熟れしゴーヤの実を仰ぎつつ
こぼれ種垂の群花占むる地にさゆらぎつくる明け方の風
輸出車を作りしトヨタの若きらの日目が積もりし寮並び立つ
草むらの広がる中をゆるゆるとバックホーは寮壊しゆく
四階建て寮の幾群続きるし渥美半島内湾の地に
ロボットに技の代はれる世となりし若き工員の寮は消えゆく
風力発電の並び立つ湾に宵を打つ漁の小舟がいでゆきにけり

藤田美智子

銀紙

・新

遠慮なき人のごとくにたつぷりと茄子は油を吸ひてゆくなり
病室の四人みな「子」のつく名前だと若き看護師笑ひつつ言ふ
宵空を二つに裂きて伸びゆける航跡雲にわれの背も伸ぶ
九回裏逆転サヨナラの人生はまつびらごめん ビール飲み干す
似る人のたとへあるとも君にあらず空の高さのいや増すばかり
悲しみはうすき銀紙はがれたるのちにじんわり寂しさのくる
鬼のまま暮れてしまひし夕暮れのあるごとしとほく缶を蹴る音

藤森 巳行

父の日

・銀

母の日に息子がくれし鉢植系のカーネーションは父の日まで咲く父の日にクチナシの花届きたり寡黙になれとの子らの暗示か紫陽花もつるバラも好き梅雨暗れの光を受けて咲きほこりたり昨年の夏瘦せ回復なきままに今年の夏を迎へてしまふ稲妻は天空切り裂き横浜の町に一瞬光を放つデモをせよ叫びし我ら高校生六十年安保遥かな昔師とともにの真の人生歩みきて今仰ぎ見む勝利の山脈

本元 由美子

孟蘭盆

・岡

火焔吐く三月十日の未明の空をわれは見しとぞ母の胎内で国中が黙して祈るこの刻も停戦もなき戦地のあるを盆棚の胡瓜の馬と茄子の牛謂れを知りて今更あはれ採れたての野菜いろいろ蓮の葉に盛れば清かな迎へ盆なり門前で高き竹筒に花を盛り迎へ火燈り荘厳に見ゆ山寺に念仏をどりの灯が明り住職親子の誦経の響く吉村の村人集ひ跳ね踊る 鉦に羯鼓に念仏響く

牧 雄彦

平和

・大

核兵器安上がりといふ候補あり啞然とするも当選果たす核武装うべなふ若き議員たち無知なることの恐ろしきかな八十年われらは何を教へしか孫や曾孫の世を憂ふ 嗚呼被爆者はみな老いにけり懸命に原爆のこと語りあるのにアメリカファースト、日本ファーストと叫ぶ人それで平和になるのか世界は戦争に過ぎし人らのたましひを踏みつけていま平和を謳歌す八十年の平和は何によるものか戦に果てし三百万のいのち

松本多摩子

終戦

・桜

終戦を二歳で迎えし思い出は何にもなしとは幸せなこと
はるばるとねふた祭りに娘と旅す羨望の目を一身にあびて
日を変えて子ら帰る日々さめきうどん店変え五日昼のおきまり
御朱印に目ざめし孫の盆帰省暑さもどろしこんびらさんへ
掃除機をかければふわり舞うほこり子らいた証盆帰省終わる
人並みに夏の疲れの出る頃かがんばった夏八月終わる
暑さ避け庭に出ないで過ごす日々見つけしさつきに糞虫あまた

三 浦 好 博

ああ無力なり

・銚

神風が吹けば悲惨は増しにけむ八十年前国滅びけむ
八十年経てば忘るる我らにて日本は日本人が滅ぼす
白木箱をせつせと作り石塊をせつせと入れて笑はざりしよ
ヘイト本平積みにしてこの大きな「未来書店」に未来はあるか
SNS操り外人出て行けと笛吹く人に子もつき行くか
日本人であるを証明せよといふデマの前にはああ無力なり
「空をゆく巨人」にぐんぐん引き込まれるでもう行けぬ回廊美術館

三 木 ま り

徨

・昂

リュウグウノツカイが空を泳ぐ夢七十日目の熱帯夜明けける
夜明けまえ三十度超えの風が吹き死者へつながら扉が開く
夢にふとことばが浮かび目を覚まし歌が生まれる白露の夜明け
息苦しいほどの熱帯夜が明けて扉の外に蟬の骸が
骸かと思えば蟬の脚つよく激しく動く空翔けるように
ひとしきり華やかな花火鎮まって八月の闇に死者を見送る
家なかに風の通う道があり薄羽かげるう夕べ彷徨う

宮本靖彦

葉月尽

・凌

帰省せる息子と妻の会話とめどなく夕食を待つ吾ほつたらかし
夏空に高し満開さるすべり昼寝の吾に起きませと揺る

講習にもらひし葉苗猛暑にも耐へて庭によりけ立ち居り
医者参り現となりぬ内科外科泌尿科耳鼻喉科皮膚科などなど
ガザの子等へ何らの助け出来ぬものか八十年前の餓え思ひ出す
国連の難民援助は疑はし困窮者支援の金額を見ず
葉月尽磨硝子に見するドラセナの熱帯踊り果て時を知らず

三好聖三

顔

・伊

外灯の下の網戸に集まれるあまたの虫やカブトムシ飛ぶ
きじ鳩はほつほつ歩く見ていればなにやら日陰を選べるように
このごろとみにあらわれて壁をつたわるやもりありたり
日本酒の好きな男がやって来てわれはビールをひさかたに飲む
顔の無き少女があふれていたるなり夕ぐれどきの工場の門
顔もてる少女がひとり歩きゆく見れば足部を病んでいるらし
継承は想像力という科白となりの婆の沢庵漬けも

御代田澄江

アテンダント

・茨

末妹の孫の目指せるアテンダント公費受け米国へ一年留学す
妹夫婦へ孫より届きし英文のレター即座に訳せば驚かる
妹孫晴れて採用の入社式「格納庫」内にてずらり二千名
妹孫「ANA」のアテンダント今日はいづこの空を飛べるや
梅雨空は何処へ行きし晴れ続き土も乾きて熱き息吐く
庭の木草花咲くいくつ咲き継ぐはダリアよ一際光を集む
ゴソリツと冷蔵庫鳴りて氷を作るアイスコーヒー味はふ夏か

もとむらしげと

カタバミ

・そ

カタバミの小さな花は踏まざりき梅雨の晴れ間の庭につつまし
茶毒蛾に葉をふれば身もだえし廻転しつち落ちてゆくなり
外米の高砂ユリを抜きにけり純白の花はまほろしとして
一杯の麦酒を飲みて赤面の「君には注げぬ」と過ぎゆく寂し
水琴窟の音聴くことききそけさに友の電話に耳を押しあつ
今日の無事明日も続くかわからないあてどなき日を爪を切りいる
佐太郎の歌を味わうひとときを朝に持ちつつ古希に近づく

桃原佳子

心が折れる

・沖

西空に虹の架かりたり今朝の空静かな一日であるよう願う
乾きたる畑に根付きし苦菜にたつぷり水遣る我に遣る如
晴天の光あふれるペランダにシートや毛布がはためきており
赤トンボ舞い飛ぶ中を草を刈るイヌビエより吹く風受けて
世話をする孫の行く末考える日々を過ごせど心が折れる
空と地を繋いで雨のひた降りぬ土砂濁流が町をおそえり
朝昼晩献立に悩む老いの日々テレビにて知る初めての料理

山下雅子

猛暑

・智

大雨と猛暑のメリハリ梅雨という人は器用に言葉を編みぬ
「熱中症」警戒アラート発動中聞きなれぬ日本語ますます増えて
これこそが線状降水帯ならん一瞬視界を打ちのめす場面
「今日は晴のち曇りでしょう」単純に明解なりし予報なつかし
つゆ明けの空を番かのびやかに優雅な飛翔のすがたに見入る
冷蔵庫に靴を冷やすと若者の声に嘩然と耳疑うも
立秋を過ぎて猛暑の辛き日々人は自然の前に小さし

山野 幸司

光

・沖

高層のビルに光は降り注ぐ涙となつて街は暮れいく
宇宙線地球軌道に漂えるかなしみのまま塊浮かぶ
八月を過ぎれば言わぬ戦争もガザの飢えたる子らは忘れぬ
対馬丸学童疎開船沈む慰霊の島よ荒波洗う
ジリジリと焼け付く日差し田の上にまだ終わらない戦禍の上に
国宝と呼ばれし女形演じいる役者も同じ芸に生きたり
刺青の女抱く女形背龍の背に掻く汗流れたり

山 本 孟

俊太郎逝きし後

・大

わが目には何も見えぬにつばくらめ口一杯に巣へもどりけり
雀・鳩・鴉・猛暑の日本がそんなによいか空涼しいか
俊太郎逝つてしまひぬ言葉借り「行き先未定」九十三歳
鍼を打ちこの元気のまま生きつづく短歌を作れと天が勵ます
赤紙のなくなりし日本八十年男子の後期高齢者増ゆ
色のなき昭和の写真 令和の子国防色はどんな色かな
トランプの関税政策わからねど世界の混乱われにもわかる

養学 登志子

つぶやき

・凌

「流す」の字蜘蛛蜘蛛がはりついてなるほど似てるかもかもしれないが
変型の葉裏の赤きベゴニアは大きな花房重おも垂るる
しんどいとこぼせる相棒いないのは淋しいよねと寄り来しひと言う
死にしあのシールカンスの腹の中旨いはずなきボリ袋喰つてた
シールカンス絶滅いわれし白亜紀にも何ぞの毒があったのだらうか
原爆忌地獄のきわみのほかに何憫懣となりてうかぶこの星
私達の敵はいったい誰だった原爆の日のつぶやきをさく

横田 敏子

復興のあかり

・福

十四年振りに浪江のわが家に準備・掃・宅をされしご夫婦
浪江町大堀地区にただ一軒電灯ともる 復興のあかり
3・11心の隅に埋もれて復興のあかりにふと目を覚ます
娘の娘の娘今日一歳の誕生日 一升餅が重いと泣きぬ
買物メモ書きつつニヤリとほくそ笑むレタスにソース、セロリにポカリ
一日をこもり一週間こもり猛暑続きしひと夏籠もる
この夏は「生きる」が仕事歌を詠み食事に睡眠、体調管理

磯田 ひさ子

風車

・森

朴の木も椋も花の季終はりたりみどりひと色に山鎖まりぬ
盛んなる季節を移り粗き陽に本草の疲れ溜める月山
草を分け歩む木道穂に出でしすすき犬蓼いろの立ち初む
道に沿ひ人は歩みぬひとすぢのこの道上りこの道下る
夏の間を草食みに来る子牛らのサマーキャンプや月山牧場
宿りたる児の流れしを抱へ来し五十年に涼風渡る
セルロイドの風車を供へ香を焚きやつと来たよと手を合はせたり

市原 やよひ

花火

・萬

久久に本物の花火見えました屋根続く向こうに半分の円の
十字路の角にて夜空見上げおり花火は地上の近くに咲きて
遅れ鳴る音が「ズシン」と身を過ぎり空に残れるかけらを追えり
教科書の花火のうたは分からざり線香花火持ち居し手には
教科書の「どんとなった花火」はこれだった平和となりし夜空にぞ知る
籠もり居の日日なれ蟬の声聞かず炎暑の八月過ぎ行かんとす
濃き赤の並ぶ日本列島指さして天気予報は今日も同じに

梅本武義

蛙の恐怖

・羊

太く伸ぶ南瓜かぼちに数多咲く雌花丈夫に育つ子の少なさよ
 按摩機に揉まれうとうと昼下がりに庭木に熊蟬急に鳴き出す
 失敗を思い出す度そのことにこだわっており呆けてはおらず
 鳴く声にふため逃げし五年生笑われ知りぬ牛蛙だと
 夢に覚めしむじみ我に戻りゆく亡き親友の姿を浮かべ
 夕光の青田に白鷺舞い降りる蛙の恐怖ガザの児思う
 祖国での矜持は何か北鮮の負傷兵士の心を思う

大浪美雪

瓜三題

・森

庭ぢゆうを太き蔓もて這ひ回り南瓜はひとつ小さきがひとつ
 覚えなき瓜科とおぼしき蔓の伸び黄色き花をつぎつき咲かず
 庭隅の立ち木の間に緑濃き楕円形のもの冬瓜なるや
 落とさぬやう両手を添へて収穫の冬瓜ひとつ三キロ程の
 打ち続く暑さに倦みたる晩夏はつるつと通る冬瓜こそよし
 隣よりのさうめん南瓜とふ瓜の湯搔くに細くほぐれゆきたり
 酢のものにはた味噌汁に二、三日楽しみたりしさうめん南瓜

奥田陽子

川風

・羊

細き路尽きんあたりに川ひらけ音たかくして見える飛沫
 川風に背を冷やされて立ちたればみんな蝉のいまだかしまし
 覆われし緑より差す光あり梢の揺れを仰ぎつつゆく
 鰯のみをみせて行きたる大鯉水面の揺れに幾度か見る
 水浅く細き流れのみゆるのみ木道いつしか取り払われて
 鰯を狙う鰯岸の辺にみじろがず川のおもてに見入れる眼
 風立ちて揺れはじめたる萩の花波となる午去りゆかんとす

神田鈴子

八月

・大

終戦日事案にもとづくドラマあり臉に浮かぶ八十年前
 八歳時の言葉にならぬ哀しみは今は胸によみがへり来る
 世界中が平和であれと心から望むは無理かむなしきことか
 どこまでも澄み渡りたる空青し かくあれと祈る人のこころも
 子や孫と曾孫も共に墓参りこの幸せを夫も見てゐむ
 墓に着くとたんの豪雨にたちろぎぬ土砂降りの中花供ふるのみ
 墓洗ふを雨に任せて大阪の実家の墓へ きらり日が射す

上林節江

炎天

・滝

湿度こそ体内温度をあげるとぞ海風の部屋に皮膚ときすます
 炎天に呼吸は乱れ歌会へしどろもどろの我を運びゆく
 キンキンのビール一氣に喉くだる歌会終えて鼻氣払いなり
 機嫌よき幕なりしかと子に尋ねお盆参りを暑さに負けて
 手作りのとうろう流す広瀬川水の少なく河原のくろし
 半年をなぐさめくれたる胡蝶蘭さいごの 一花八月に散る
 四十度超えのうつつの生き難さ致にも蝉にもイネにわれにも

菊地栄子

シャッターチャンス

・海

午後三時高校野球の決勝戦選手の背後に飛び交う蜻蛉
 きのう今日挨拶するがにまといくる玄関前のムギワラトンボ
 用持ちてバス待ちており綱渡りしているような八月二日
 幾つもの白き球なす紫陽花のシャッターチャンスはわが眼にて切る
 酔けさに二つのブランコ動き出すだあれも居ない夕方となり
 我にのみ吹きくる風と思いたき素肌にひんやり風渡るとき
 見つからねば怒りのごとく一尺の図体となり胡瓜はまろぶ

河野繁子

隠れ場

・雁

たがやさぬ畑たちまち草しげり獣の子供ら育つかくれ場
しげみより顔を出だせる子狐のまあるく強き目力にあう
そそくさと隠れし一匹逃げゆかずこちらを睨む意志つよき生き
夏至を過ぎひきかえし来る朝の日にカーテン引き野球楽しむ
核の傘居心地わるし地球より人のほろぶも遠くなきかも
プーチンに近づきたくてたくさん命を贈り遺族を抱く
「亡き人のお浄土からの声を聞く」一枚めぐり長月となる

近藤 栄 昭

遊弋

・虹

空電に天気予報が聞き取れず TENT 押さえるまもなく来るか
一瞬の時間の間に起こりたるおちよこの傘を笑いもできず
月面のクレーターのような静けさを欲しいと思う改札を出て
回転草西部であれば飛び回るか空つ風吹く上州の畑
燧ヶ岳最後の難所渡れるか雨列の薙は深く掘られて
心臓を押し出されゆきあはあはと肺を綺麗に今日は山へ
目の前を遊弋している大ボラは獲物にならず見惚れておりぬ

近 藤 芳 仙

吉野五月 (三)

・信

葛きりを食みし記憶に葛うどん汁にも葛の入るをすすする
みはるかす奥千本の山肌は桜若葉に楠の黄白色ざかり
食べきれぬ柿の葉寿しを分かちあひリュックの人と話がはつむ
世界遺産金峯山寺の蔵王堂 威風あたりを払ふありさま
素朴なる吉野を尋ねきたる目に重層人母屋造りの威厳
遠近に宮柝かれて幾万の修験の人の足跡を追ふ
霊験は得られざりしも幾許か心洗はれ吉野を下る

坂 上 直 美

酷暑

・天

人間の皮を脱ぎたきこの暑さアメーバならば感じざらんか
いつの日か街は砂漠になるならん川は干上がり街路樹は枯れ
北極の水は溶けて沈みゆくツバルの民はいずこ行くべき
八月の予定中止か延期かに為すこともなく部屋に籠もれる
うつけみの命を惜しみ汗に濡れエアコンの部屋に麦酒飲み干す
我が祖先渡り来たれり南より流るる汗は潮の匂いす
あ、ひぐらし 早起きたるご褒美かヴェラランダに吹くかすかなる風

坂 出 裕 子

桔梗

・洛

酷熱の熱暑の夏を涼し気に桔梗咲きをりむらさき淡く
窓の辺に立ち眺むるむらさきの桔梗に秋の涼をいたたく
もうすぐに秋が来るよと励ましてくれているやうな気がする花が
くれなゐの日々草とむらさきの桔梗の花に元氣いたたく
朝夕に窓辺に立ち眺むれば花は親しき家族のやうに
コロナ禍の世にはあれどもつつがなく在るよろこびを花に告げをり
今日の日をいかに生きむと悩むことなく過ぎてゆくコロナ禍の日も

佐 藤 道 子

異 常

・甲

山あちさる夜目にも白く匂ふ中クワンクワンクワンと狐が通る
高崎山より避暑に来るとふ猿軍団今年は見えずいくへ行きし
竹似草見上げる程に育ちゐてお化けのやうな葉を垂らし居り
御先祖様のささやきと言ひし竹似草実のささやきなど聞こえぬ高き
道端の樹木の枝が空抱ひジャングルみたいと言ひつつ歩む
カーディガン必須なりし山の家今は半袖歩けば汗かく
蟬の声聞く事なかりし千米 今は朝からミンミン鳴けり

篠原まり子

ひとり言

・羊

降りきらぬままの梅雨明け六月の気温はすでに三十度超ゆ
花粒は開くことなく炎天のブライダルベル花屋の店先
雨の朝ボストに入れた封筒よ迷子になったら帰っておいで
ふたり目の孫の懐妊告げられて指折り数えわが身危うき
迫害と愛と戦う映画あり真昼涙すネルソンマンディラ
親友はA Iとう人間は心強き心寂しきか
雲のなき真つ青の空四十度人を殺める自然の力

柴田登志恵

明るき方へ

・天

お別れはもう済みましたと去りゆきし猫はおそらく生家の地霊
ひとり居の母を支へし地霊なり猫に雀に形姿へつつ

人はみな命短く誰も彼もゆきてしまへりと地霊は言ひぬ

この地何ぞ捨つらむとすと問はれしがほどなくわれも逝かねばならぬ

親族らの終なる裔の務めとて地霊の背押す明るき方へ

人さばに暮らし商ひの場ともなる新たしき道地霊行きなむ

パソコンのストリートビューに父母が家五月の光振りまき立ちぬ

鈴木結志

孤独くずし

・福

「水と去る合わせれば法の謂れあり」知力ひき出す頭の体操
あなたから見れば念込むみじかうたリトマス試験紙になっているやも
自らの孤独くずしの執念におのが永存の書の技を練る

「愚公山を移す」とうことわざにしたがい一途おのがうた詠む
筆さばき生きのあかしの技を練る年輪が積む好奇心とも

うたに書に一途はぐくむ満足感こころのマップ詩組みにおぼゆ
ふでとりて生きの九坂をのり越ゆと白寿ひたすら書の技を練る

関根榮子

猫じゃらし

・埜

欄干にもたれて眺むこの川に螢の飛びいしはるか昔に
夕暮の公園に來つこの夏は猛暑のゆえか蟬しぐれなし
いっせいにえのころ草のそよおり猫じゃらしと呼びし幼日
清々と白き花咲くやぶ若荷日照りの庭先すつくと伸びて
夕餉にと背紫蘇を摘むほの暗くなりたる庭に香りの満ちて
コンビニへ行くためようやく立ち上がる暑さに居間を半日出です
この暑さ言ひ訳にして今日もまた家事など手抜きまた後回し

関根和美

プリズベン

・埜

チタン棒とれざるままの夫の腰フライト九時間を耐えたるよ今
高度下げ旋回なしいる機窓より子の勤務地のモートン湾見ゆ
はじめてのプリズベンなり冬といえ陽光あふるる起伏もつ町
あっぱあば、じいじもいると孫ふたり手を振るバギーに足はたつかず
冬のこのシャワーは苦手ぬくぬくの浴そう恋いおり異国にあれば
カンガルウラビーゆったりくつろげる芝生ひろがる子のキャンパスは
ころころと大きなイカと海老ののるピZZマリナラこれぞ豪州

久我田鶴子

とかげ

・羊

炎天に走りいでたるよく見れば尾のなきとかげ 猫の手の前
柿の種まつぶたつにせし断面に白い木すでに 消えたり未来
もうわたし要らないのですかと電話くるおほきなこゑに應へて大声
高齡のひとよりさらに高齡のひとが世話役 限界をいふ
宮廷画家ゴヤが版画にせし戦争ひとの狂気を白と黒とに
「戦争の惨禍」つきつく手から手へ見ては広めてゆける版画に
殺す人 殺さるる人 輪になつて踊る人らが投げ上ぐる人